

病理部・病理診断科

教授（部長）

深山正久*

准教授

柴原純二*，牛久哲男*

佐々木毅*（遠隔病理診断・地域連携推進室長）

講師

森川鉄平（病理部）

病院講師

池村雅子

助教

新谷裕加子，前田大地，松坂恵介，阿部浩幸（病理部）

牛久綾*，田中麻理子*

医員

河辺昭宏，大日方謙介

ホームページ <http://pathol.umin.ac.jp/>

沿革と組織の概要

病院病理部と病因病理学専攻人体病理学・病理診断学分野（*）は、一つのユニットとして機能し、東大病院の病理診断業務（剖検・病理診断）と、人体病理の教育、研究に当たっている。

平成 24 年度の病理部固有のスタッフ構成は、講師 1 名、助教 5 名、医員 2 名であった。

4 月より佐々木博士が遠隔病理診断・地域連携推進室長（准教授）として赴任し、「遠隔病理診断・地域連携推進室」を立ち上げた（www.h.u-tokyo.ac.jp/vcms_lf/dayori79.pdf 東大病院だより No.79）。さらに病理診断科を開設し、病理外来を開始し、佐々木准教授が乳がん患者に病理診断の説明を行っている。

診療（病理診断・剖検）

平成 25 年度は、組織 16,811（検体数 23,272）件、細胞診 19,896 件、迅速診断 790 件、迅速細胞診 486 件、院内剖検 53 例（剖検率 16.1%）、受託剖検 1 例であった。

手術症例については、以下のカンファランスを行っている（カッコ内は責任スタッフ名）。呼吸器外科（牛久綾助教）、肝臓・胆膵（柴原准教授、田中助教）、泌尿器（森川講師）、婦人科（前田助教）、乳腺（池村病院講師）、整形外科（牛久准教授）。生検について臨床各科と定期的にカンファランスを行っている臓器は、腎臓（新谷助教）、皮膚（前田助教）、消化管（松坂助教）である。

我々の業務上の目標は、正確な診断を可能な限り早く臨床に提供することであり、迅速組織標本作製装置を用い、one-day pathology を実現する

べく努力している。また、報告書、スライドのレビューを全例について行っており、確実な診断を保証するため、継続的に努力している。

バーチャルスライド・スキャナーを導入し、すべての生検標本をデジタル情報として保存している。今後、病理画像を院内に広く提供することを目指している。

病理解剖に関しては、全例について毎週月曜日に臨床・病理所見を検討している。また、病院CPCを毎月1回行い、毎回2症例について検討しているが、平成22年度からはその内容をCPCダイジェストとして院内に公開している（新谷助教）。

厚生労働省「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業」への協力を継続している。

教 育

M2を対象に系統病理学講義、実習を行っている。ベッドサイドラーニング（BSL）はM4を対象に行っている。クリニカル・クラークシップでは、3名の学生を受け入れた。

卒後臨床研修制度で各研修医に義務付けられているCPCレポートの指導を行った。CPCスライドのダイジェスト版を院内に公開しており（新谷助教）、また、臨床研修医が自ら問題を解決して、CPCの内容を理解できるよう、CPC e-learningコースを作成している（池村病院講師）。平成25年度5月には初期研修医全員が修了することとした。

また、研修二年目のプログラムとして、平成25年度には8名の研修医（延べ26ヶ月）を病理部に受け入れた。

研 究

佐々木准教授を中心に遠隔病理診断の信頼性、有用性に関する実証研究を進めている。

死後CT画像の病理解剖を補助する手段としての有用性に関する研究を継続している（新谷助

教・阿部助教）。オートプシー補助CT室に設置したCT装置を用い、死後画像を撮影し、放射線科とともに、画像所見と病理解剖結果を対比し、病態理解の向上に役立てるべく検討を行っている（人体病理学・病理診断学分野出版物：文献26）。

臨床各科とのカンファランスを基に、腫瘍性疾患の概念整理、病理形態学的解析に取り組んでいる（人体病理学・病理診断学分野参照）。とくに東京大学先端科学技術研究所ゲノムサイエンス部門、上部消化管外科と共同で、癌特異抗体を用いた新たな診断、治療方法の開発に取り組んでいる。胃癌のセンチネルリンパ節への転移を漏れなく検出する目的で、原発巣、転移巣についての組織マイクロアレイを構築し、最適の抗体を選ぶため検討を進めている（牛久准教授、松坂助教、阿部助教）。その他、肝胆膵外科、上部消化管外科とPET、in vivo imaging などを取り入れた技術開発にも協力している。

出版物等

人体病理学・病理診断学分野の該当項参照。